

車王府本鼓詞『三國誌』成立考

——省略について——

後 藤 裕 也

はじめに

清代中後期、北方を中心に流行した芸能の一つに鼓詞がある。とりわけ三国ものは人気の演目であつたらしく、現在も多くの曲本が抄本の形で残っている。しかし、確認されている限りにおいて、語り物三国志の全編を余すところ無く伝えるものは、唯一、北京の車王府に収蔵されていた『三國誌』のみである。⁽¹⁾これは、『三国志演義』(以下、『演義』)をもとに語り物へと改編したテキストであるが、筆者は専らこの車王府本鼓詞『三國誌』の全体像を明らかにするため、これまでに二編の小論を発表し、⁽²⁾底本及び挿入された説話に焦点を当てて論じてきた。本稿では、『演義』との比較を通じて、省略された箇所を可能な限り具体的に挙げることにより、『三國誌』制作者の改編態度を明らかにしていきたい。

本稿で焦点とする『三國誌』の省略について述べる前に、まず最初に二つの例を挙げておきたい。⁽³⁾

『三國誌』卷七十一

文武聞聽曹言、盡皆拜伏於地、齊說、丞相之心包羅天地也。豈常人可比。不言曹營之事。△省略▽且說周郎夜晚上將台探看曹營虛實。猛然見曹寨中帥子黃旗、被風擺的旗角向東、刮的盡是西北風。周郎猛然醒悟說、哎呀、且住。吾用火攻、西北風一起、豈不反燒了自己麼。某千方百計竟成畫餅。

思了半日無別計 一心要把患病^(魯)庄 大叫一聲將舌咬 口中吐血倒在塵

『演義』「鎖戰船北軍用武」(048b)では、曹操が詩を詠んだ後、船を鎖でつなぐと敵の火攻めに対応できないという臣下の進言に対して、この時期に東南の風が吹くことはないと反論したところで、焦触と張南が先手を願うところ。これに対して呉軍は韓当・周泰が二人を迎え撃って退ける。周瑜は逃げ帰る敵の水壑を眺めやっていたところ、強風が突然吹き起こり、旗の端が顔に当たると、火攻めには逆風が吹いていることに思い至り卒倒してしまう。

一方、『三國誌』では引用文の一行目を見ると、諸將が曹操の見識にひれ伏した後、「不言曹營之事」とあって、焦触・張南の出陣には触れず、ということはおのずから韓当・周泰の迎撃も端折られることとなり、すぐに周瑜が旗に吹きつける風を見て逆風に気づき、血を吐いて倒れてしまった、となっている。この場面は赤壁の戦いの前哨戦とも言えるが、かりにこの一戦が無くてもストーリー展開には何の影響もないため、上述の一句によって簡単に削られてしまったと思われる。

第二日霧散雲收風浪靜 臥龍先生傳令起行營 南蠻王孟獲告辭去先不表 衆蜀兵渡過汪洋水孟津
 這正是鞭敲金登徹人馬 敲金登車唱凱歌聲 此書剪斷休煩絮 那一天看見成都一座城

次に引用した内容は、孔明が南征を終えて成都に戻るとき、瀘水の荒れを「饅頭」で鎮めて渡った『演義』「祭瀘水漢相班師」(091a)の一場面である。「此書剪斷休煩絮」という句は、省略や場面の転換をする際に用いられる常套句で、『演義』では成都に着くという描写の前にある、「行到永昌、孔明留王伉・呂凱守四郡。」の句が、これによって削られている。

ここに挙げた二例のような、内容に影響のない文単位程度の省略は、至る処に見られて枚挙にいとまがない。それゆえ、本稿ではこのような省略について逐一挙げることはせず、以下では基本的には一則、あるいはそれに近い分量の省略箇所を挙げ、とりわけストーリー展開に影響のあるものや、『三國誌』の特徴を伺えるような例を中心に、内容によって分類しつつ検討を加えていくこととする。なお、末尾に付した『三國誌』・『三國志演義』対応表⁽⁴⁾も適宜参照していただきたい。

一、漢室についての省略

①『三國誌』卷五

天子傳旨、處處拿三人。劉爺聞知不肯歸本處、三位領着車直撲戴州^(代)而來。此處太守劉恢與劉爺弟兄、將三位留下。
 ▲省略√且說天子駕崩、文武保劉辯爲君、二太子封爲陳留王。太子登基爲少帝、大家商議要得天下安靜、先將十

常侍除清、方得太平。這日董卓在溫明園設宴、把衆文武請至。

まず本節では、後漢王室に関する描写の省略を取り上げる。「演義」第二回前半は、張飛が督郵を鞭打ったあと劉備らを捕らえるための詔勅が下り、劉備らは代州太守劉恢のもとへ身を寄せ、劉恢が劉備らを「留置在家不提」となっている場面が変わる。第二回後半の一則は、靈帝が崩御すると何進が妹の生んだ皇子弁を天子の位につけ、宦官誅殺を謀って各地から軍閥を招き寄せようとする場面で、第三回に至って董卓が乗り込んでくるという話の流れになっている。しかし、「三國誌」では、「演義」「何國舅謀誅宦豎」(002b)の一則に相当する話がたった数十字に省略されており、いきなり董卓が少帝廢位を諮るも丁原に反対されるという、第三回も半ばあたりの場面に続いていく。

② 『三國誌』卷九十九

「演義」では、関羽が単刀会より去ると、孫権のもとに曹操進攻の一報が入り、孫権は守りを固めるよう指示を出す(066a)。一方、曹操は出兵する前に、今は武を用いる時期ではなく、文に重きを置くべきであると傅幹に諫められる。曹操は諫言を聞き入れ、文治に力を注ぐ。時に伏皇后は穆順に密詔を授けて父伏完と曹操誅殺を企てる。しかし、事が露見して一族みな処刑される。曹操は自分の娘を天子に押しつけた後、夏侯惇に呉蜀征伐を諮ると、夏侯惇は、まず張魯を破ってから勝ちに乗じて蜀を攻めるべきと進言する(066b)。曹操はいよいよ夏侯淵・張郃を先手として西征する。張魯は弟の張衛らに迎え撃たせるが、曹操軍の攻勢に押されるばかりであった。そこに閻圃が、曹操軍を退けられるのは龐徳のみと言って張魯に推薦する(067a)。

孫權聽見呂蒙來報說、關雲長走脫、並無拿住、心中大怒、要領兵與老爺決一死戰。忽有遠探來報說、曹操起兵三萬來取江東。孫權聞聽吃驚、忙差呂蒙回報魯肅、休惹荊州之兵、急往合肥濡須堵擋曹操。△省略a▽且說曹操兵取東吳、參軍付幹攔擋說、孫權與劉備和好、莫若先往東川收伏了張魯、趁得勝之兵在征孫權劉備可也。曹操雖言親領大兵、竟往漢中而來。早有東川遠探報與張魯。張魯聞聽心中大驚、連忙聚重商議。△省略b▽謀士閻甫說、主公不必害怕、我保一人敵擋曹操。張魯問道却是何人。閻甫說、南安的龐德令、他前去可擋曹兵。

右は、『三國誌』卷九十九第一葉からの引用であるが、その内容を確認していくと、単刀会後、孫權は曹操來襲の知らせを受け、守りを固めさせる。曹操は、まず張魯を伐つべきであるという傳幹の進言に従い、漢中へ向けて出兵する。張魯が曹操軍侵攻の知らせを受けて群臣と協議すると、閻圃が龐徳を登用するように勧めた、となっている。一見して『演義』のストーリーが簡略化されているのが見て取れるが、その異同を具体的に検討すると、△省略a▽では孫權が曹操來襲の報を聞いて準備を固めた後、傳幹が張魯を先に攻めるようにと曹操に進言している。つまり、『演義』では「文を重んじるように」という傳幹の諫言が、伏皇后らが処刑された後に夏侯惇が発する漢中侵攻の進言にすり替えられているのである。これにより、その間にあった「伏皇后爲國捐生」(066b)の一則が、『三國誌』では破綻を生じることなく省略されている。

以上、①、②の二例は、それぞれ靈帝の崩御と跡継ぎ問題、曹操の篡位を恐れて皇后自らが企図したクーデターという、後漢王室にとってはともに非常に重大な事件のはずである。では、なぜ『三國誌』では省略の対象となったのか。案ずるに、『三國誌』の制作者にとって何よりも優先すべきは聴衆の興味であったはずである。聴衆の興味に沿

って「演義」を改編するとなると、積極的には聴衆が未知の物語を挿入し、一方では興味を感じない部分を省略するという手法が選ばれるであろう。つまり、後漢王室に関する描写の省略は、それが当時の聴衆にとって興味の対象外であったことを示しているのである。

②の△省略b▽は後漢王室とは関係なく、些末な内容の省略ではあるが、あわせてここで触れておく。「演義」では張魯が曹操侵攻を知って臣下に諮り、いったんは迎撃するが、防戦一方となったところで、閻圃が龐徳をようやく推薦する。しかし、『三國誌』では最初に曹操が来たことを聞いた時点で、閻圃がいきなり龐徳を勧めるとなっており、「曹操平定漢中地」(067a)の前半にある迎撃の戦闘描写が端折られている。この箇所は、前後にある類似した場面をまとめて一つにすることで、その間にある一段を省略するという典型的な手法である。すなわち、『演義』の曹操出兵後にある「早有細作報入漢中來、張魯與弟張衛商議退敵之策。」と、防戦一方になったところにある「張魯慌衆文武商議。」の両者に共通する相談の場面を一つにして、迎撃の一段が省略されているのである。その意味では、「伏皇后爲國捐生」の前後にある、傳幹の諫言と夏侯惇の進言を、すり替えて「傳幹の進言」としたところもその応用と言えよう。

さらに、「早有細作報入漢中來」の句は、問者が情報をもたらすことを利用して、そこから場面が転換するという機能を持った、いわば「演義」のタームとして捉えることができるが、『三國誌』の省略において、問者の報告がどうやら制作者のキーワードになっているらしいことは後述する。

二、呉についての省略

③『三國誌』卷五十五至五十八

次に、呉に関する描写の省略を取り上げる。『演義』では、いわゆる「古城聚義」のあと、袁紹は曹操を伐とうとして孫策に書簡を送り(028b)、場面が呉に移る。呉では、孫策が曹操に通じようとした許貢を斬り、却ってその食客に襲われ重体となる。そのような時に、于吉仙人を斬り殺したため幻影に悩まされ、後事を孫権に託して死ぬ。曹操は孫権に官位を与え誼を結ぶ(029a b)。それを聞いた袁紹は官渡に軍を進め、曹操との戦端を開く(030a)。一進一退の末、兵糧の乏しくなった曹操軍は、許攸の寝返りを契機に袁紹軍の兵糧貯蔵地を奇襲し撃退する(030b)。冀州へ帰った袁紹は軍を立て直し、倉亭に進軍して曹操軍と対峙したが、一敗地にまみれる(031a)。そんなおり、曹操のもとへ汝南に陣取る劉備軍が許昌を狙っているとの一報が入ったので、曹操は劉備軍を打ち破ると、劉備らは荊州の劉表のもとへ落ちていった(031b)。さらにこのあと第三十二、三十三回において、曹操軍が袁紹軍を北方に駆逐して滅亡に追い込むまでの過程が描かれている。ついで、荊州へ着いた劉備らに場面が変わるといふ筋書きである。では、『三國誌』卷五十四、古城にて再会した直後の場面を見てみよう。

往事休提起

且商量咱往何處去存身

古城地窄錢糧又少

要立大事萬不能

劉爺說會合汝南是正禮

劉辟龔都早舊應

勾連上他的人馬添羽翼

硬攻許昌去滅奸雄

夫子點頭說有禮

第二日傳齊三軍收拾良草舊起身

古城也有人看守

却是那糜竺糜芳二弟兄

玄徳同衆拔營寨

竟撲汝南城

會合那劉辟龔都興人馬

上許昌來把曹操奸相平

汝南的龔都劉辟起先不肯接連劉爺、如今見了關公張爺趙爺周倉關平這一千好漢、二人俱願相從。兩下裡的人馬八萬有餘、龔都鎮守汝南的城池、劉辟隨征挑選了五萬精兵、不多時操練。差能幹細作上許昌打聽曹操的動靜、單等着有信回來、方好動兵。此書剪斷、那日細作回來稟報說、曹操現在領兵去征袁紹、在食亭大戰。劉爺聞聽心中大悅、對衆說、趁此曹操不在許昌城內空虛、我兵一至、必然成功。

『三國誌』における「古城聚義」後の展開は、劉備らが汝南の龔都・劉辟の軍を吸収して許昌を狙うも曹操軍に敗れ、荊州の劉表を頼って落ちてゆく、という非常に単純なもので、呉の孫策が死んで孫権が跡を継いだことには全く触れていない。さらに、これは次節に属すべき内容であるが、袁紹と曹操の一大決戦である官渡の戦い、及びその後の曹操軍の追撃から袁紹の滅亡に至るまでの内容も一切見えない。一方で、許昌を狙って荊州に落ちていくまでの劉備軍と曹操軍の戦いには四巻分もの紙幅が費やされており、そのまま『演義』第三十四回の内容につながっていく(付表参照)。『演義』ではたった半回分しか費やされなかった話が、挿話や戦闘場面の描写を使いながら随分と拡大されているのが見て取れる。

ちなみに、引用した唱詞の最後の部分、『演義』で該当する箇所には、「於是遂起軍往汝南住扎、招軍買馬、徐圖征進、不在話下。」とあって、ここから一旦場面が孫策に移るのだが、『三國誌』の制作者はこれを利用して、次に劉備らが登場する「玄徳荊州依劉表」(031b)の場面まで話を端折り、劉備対曹操という主役同士の争いを拡大描写し、ついで曹操軍による袁紹追撃の二回分をも飛ばして、『演義』第三十四回の「却説玄徳自到荊州、劉表待之深厚。」に

つなげていのである。これは、①で指摘した『演義』の「留匿在家不提」を利用した省略と同じく、『三國誌』の典型的な省略方法と言える。

④『三國誌』卷一百三十一

人報曹真王雙死

他竟成病漸漸沉

拾回洛陽且不表(省)入省略

在說先生老臥龍

回至漢中晏仲將(老)

犒賞那

馬步三軍手下兵

先生對衆開言道

叫一聲

列位留神仔細聽

非是吾今徹人馬

所爲歇息養精神

滅魏須走陳倉路

才能旗開可立功

說着分付人去探

那里去

細細打探稟報名

奉命的人前去陳倉哨探、此書剪斷、探子回來報說、守陳倉的守將郝昭(省)今身染病重病、着床不起、打探真實、特來稟報。

場面は曹真軍の計を逆手にとって魏延が王双を斬り、それを聞いた曹真は病を患い洛陽へ退却したところ、『演義』「襲陳倉武侯取勝」(098b)である。引用文を見た限りでは何の問題もないように思えるが、しかし実際には、傍線部の場面転換の間に孫権が帝位につく話が挿入されており、その後で、陳倉の守將郝昭の重病を孔明が知ることになっている。

⑤『三國誌』卷一百三十六

司馬懿宣正自憂悶、小校來報說、聖旨到了。他帥領百官、把欽差接將進來。開讀皇宣、原來是東吳的孫權三路興兵來犯洛陽、當今的魏主遣將、命司馬懿暫且監守勿戰的一道聖旨。司馬懿打發欽差回去、深溝高壘、堅守不出。
 へ省略▽且說孔明在祁山欲爲久駐之計、命蜀兵與魏民相親種田。

『演義』第一百三回、木牛流馬を使った孔明の計略に敗れた司馬懿は、追っ手の變化から逃れるために冠を反対方向に捨て、かろうじて逃げ延びる。自陣に戻った司馬懿がふさぎ込んでいたところへ勅使が訪れ、呉軍の侵攻、及びそれゆえ堅く守り蜀と争わないように、との旨を告げて場面は魏呉の戦闘へと移る。しかし、実際は一戦を交えただけで両軍様子を見るだけの短い一段であり、ついで孔明が長期戦の備えをするという場面に戻ってくる。『三國誌』は引用を見れば一目瞭然、呉の侵攻には一文字も費やしておらず、展開も却って滞りないため、聴衆にしてみれば、この方が容易にストーリーを追えたであろうし、さらに言えば、孫策の死や孫権の即位でさえ省略されるのであるから、呉軍の侵攻と魏軍の対応に関する一段など、余計でさえあったのかもしれない。

三、魏についての省略

⑥『三國誌』卷三十三

前節③で挙げた曹操が袁紹を滅ぼすまでの省略は、本来ここで取り上げるべき内容であるが、『三國誌』と『演義』の対応を重視して先に指摘しておいた。本節ではそれ以外の魏に関する省略を挙げておく。

まず、『演義』の「轅門射戟」に続くあらすじを簡単に示しておく、張飛が呂布の馬を盗んだことから、劉備らは曹操のもとへ逃げ（016a）、曹操は張繡の討伐に向かう。そこで、鄒氏の色香におぼれた曹操は、典章を失うもかろうじて逃げる（016b）。一方、皇帝を僭称した袁術は徐州の呂布を攻めるが益なく退き（017a）、曹操は袁術を征伐するため劉備・呂布・孫策らと攻め込み、袁術を破ったものの、一旦、許都へ引き上げた（017b）。明くる年、再度張繡を攻めたが、賈詡の計略に陥って敗退する（018a）。曹操は劉備に呂布討伐の協力を要請する手紙を送ったが、その返書が呂布の部下である陳宮の手に渡る。さっそく劉備を攻撃する呂布に対して、曹操も夏侯惇らを援軍に送る（018b）。

『三國誌』では、劉備らが曹操のもとへ逃げた後、袁術が大軍を興し、曹操が征伐に赴く（巻三十一）。しかし、壽春城が落とせない、それを放棄して張繡討伐に向かうが、鄒氏の色香に溺れる（巻三十二）。そこで典章を失いながらもかろうじて曹操は脱出し、次に呂布を伐つため劉備に書簡を送る。これが敵に漏れ、呂布に攻められた劉備は関羽・張飛ともはぐれ、許都へ向かう（巻三十三）。

比べてみると、『三國誌』のこのあたりの展開は概ね『演義』の物語に沿ってはいるが、『演義』では曹操が二度にわたり張繡討伐の軍を興しているのに対して、『三國誌』では、鄒氏に溺れ典章を失った第一次張繡討伐が、第二次討伐の場所に入ること、『演義』「賈文和料敵決勝」（018a）の一則が省略されている。

⑦『三國誌』巻一百零七

夏侯惇

把楊修之言拆說明

奸曹早有楊修意

只因他才學過於人

分付快把楊修喚

大罵狗官惑孤兵將

我那有這回兵意

你今妄把我令行

分付兩邊與我綁

急速開刀問典刑

曹奸一怒、將楊修推出。不多時、人頭送上、衆文武嘆惜。曹令人將楊修的人頭掛在高桿示衆。△省略▽惡賊曹故意要殺夏侯惇、衆官告免。曹令來日進兵與劉爺決戰。

『演義』における「曹阿瞞兵退斜谷」(072b)の内容は、むろん則題の通り、曹操軍が斜谷に退却する場面であるが、實際は楊修の故事を紹介することにそのほとんどが費やされている。まず、進退に悩む曹操の発した「鶏肋」という言葉の含意を楊修が推し量り、夏侯惇らに退却の意を伝える。それを知った曹操は、内心を見透かされたことから怒りを覚え、軍心を惑わした罪で楊修を斬り、見せしめとする。ここで『演義』は、「原來楊修爲人恃才放曠、數犯曹操之忌。」とあって、過去の楊修にまつわる話柄をいくつか並べ、曹操が才氣すぐれる楊修を以前から煙たがっていたことを述べる。その後、夏侯惇をもわざと斬ろうとするが、周囲の取りなしで許すという構成である。

一方、『三國誌』では楊修の故事をきれいに削除して、そのまま話をつなげている。この部分は、もとよりストーリー展開とは関係なく、物語に色を添えるために挿入された登場人物の逸話なので、取り込むに足りないかと判断されれば、省略もまた容易である。その代わりというわけでもないであろうが、『三國誌』巻一百零二より始まる漢中争奪戦は、劉備が漢中王に即位する巻一百零七まで続く間に、戦闘描写がやたらと多く挿入されている。特に巻一百零六、一百零七に見える戦闘場面はすべて『演義』には見えないもので、孔明指揮の下、曹操軍に追撃を加えて連戦連勝を飾る劉備軍の話は、まず聴衆の嗜好に合致していたに違いない。これは、漢室や呉、魏の描写が省略されている

ことと好対照をなしている。

⑧『三國誌』卷一百二十五

臥龍先生自得平南回來、威名遠振。這一日遠探來報說、曹丕去世、如今是曹叡登基。不用司馬懿。探聽其實、特來稟報。孔明聞言心中大喜、乘此我當伐魏委主久矣。奈有司馬懿未從輕舉。委王魏既不用他、吾何憂哉。

本稿冒頭二つ目の引用からさらに十句ほど唱うと、この散文に入る。『演義』では、孔明が成都に帰った次の一段は、曹丕の崩御、曹叡の即位とともに、司馬懿が自ら望んで西北へ赴任することが述べられ、そのことが、「早有細作飛報入川」にはじまる一段で孔明の知るところとなり懸念する。そこで馬謖が一計を案じ、故意に司馬懿謀反の流言を広めることで、司馬懿を更迭させることに成功する。続く一段は「却説細作探知此事、報入川中」ではじまって再び蜀に場面が移り、司馬懿更迭を知った孔明はいよいよ「出師の表」を上奏することになる。

そこで、引用の傍線部以下を見てみると、曹丕の逝去と曹叡の即位を述べたすぐ後に、司馬懿が登用されなかったと続いている。つまり、ともに間者の報告による曹丕の逝去から司馬懿の赴任する場面、及び馬謖の計による司馬懿更迭の一段が一つにまとめられているのである。これも、二度繰り返される類似の語句を利用して、その間にある内容を省略するパターンである。

先にも述べたように、間者の報告は『演義』において場面轉換の機能を有しており、魏と蜀に場面がめまぐるしく轉換するこの箇所は、その好例と言えよう。と同時に、「間者の報告」を利用すれば、ただ事実を述べるだけで、一

場面の描写をいともたやすく省略できることに気づかれるであろう。『三國誌』の制作者は、『演義』の「細作」に細心の注意を払いつつ、省略可能な場面を探っていたに違いない。

四、末尾三卷における省略

④『三國誌』卷一百三十七

ここまで内容別に例を挙げてきたが、『三國誌』の省略は末尾の三卷において極めて甚だしくなるため、本節では最後の三卷について、一卷ずつ省略箇所を確認しながら検討していく。この『演義』一百四回前半に相当する箇所に大きな省略はないが、細かく数箇所が削られている。

魏延直趕了二十餘里、放回大寨、見孔明交令。孔明叫文長自回本營把守。又把姜維喚至帳中。△省略▽

孔明說惟有一事要經心 蜀中之道休多慮 還有那平陽(益平)之地要留神

ここでは孔明が姜維に兵法書を託す一段が省かれ、最後の「ただ陰平の地のみ留意せよ」という言葉に続いている。

孔明令人看座、望着李福講話。

病榻上臥龍未語長吁氣 說道是尚書留神你是聽 不幸我中道喪亡天之命 虛廢了國家大事成罪人

我死後公須當宜謹慎 竭力盡忠並其心 國家舊制不可改△省略▽

孔明又説、吾看咱國惟有姜伯約智勇足備、可以斷後。楊義(傳)含淚受命。

孔明は、後主の命で陣中見舞いに訪れた尚書李福に、忠義を尽くして後主をもり立て、國家の制度をむやみに改めぬことを言い含めた。そして傍線部であるが、姜維ならば魏軍の追撃を断つことができよう、と伝えるが、その言葉を聞いているのは李福ではなく楊儀である。実はここにも省略があり、『演義』では李福が成都に帰った後、孔明は陣屋を見回り、もはや陣頭に立てないことを嘆く。そして楊儀を呼びつけて、緩やかに兵を退き、姜維にしんがりを託すことを伝えるのである。傍線部はそのままでも読めなくはないが、やはり唐突な感を抱かせるであろう。

さらに、李福が國家の後事を任せる人物を孔明に尋ね忘れたため再度やってくる。ところが孔明は意識不明の状態で、李福は國家の大事を誤ったことを嘆く。『演義』では、孔明がここで目を覚まし、李福に答えるのであるが、『三國誌』では「李福放聲大哭説、我誤了國家大事。這且不表。且説司馬(傳)宜與蜀兵交戰、料着諸葛孔明已死。」となり、やはり繋がりを欠く。

引用が長くなるが、以降の場面においても省略箇所が続いているので、煩を厭わず挙げておく。

諸葛大名垂宇宙

宗臣相直肅清高

三分割據多籌策

萬古雲霄一羽毛

伯仲之間見伊呂

指揮若定失蕭曹

運移(傳)汗祚終難復

志決身殲軍務勞a省略

漢後主謹遵武侯遺言話

把蔣琬封爲丞相大將軍

費禕尚書同理事

封姜維輔汗將軍大元戎(傳)

楊義(傳)心中生不忿

對着那尚書費禕出怨聲

早知天子無眼力

享着那丞相亡時反軍營(傳)

代領兵丁去投魏

這時保管職不輕

費禕把此言奏天子

後主聞知動無名

將楊義拿赴問了斬殺罪

多虧蔣琬奏汗君

念楊義多負勤勞饒性命

聖主開恩沾赦容

汗天子准奏傳旨把楊義貶

他反到含羞自刎見閻君

△省略 b √

這一日人報北魏的曹叅死

又有曹芳領武文

司馬宜獨掌朝綱理大事

中原的多官把他尊

專權害了名曹爽

夏侯楨心中惱怒降汗君

後主收下司馬大將

姜維奏主要興兵

說為臣願犯中原去伐魏

成功後再把東吳一掃平

汗主說丞相尚且不能滅魏

只怕將軍任用工

姜維說臣於西羌相和好

借他之兵功可成

天子說既然要去須仔細

姜維回答主放心

言畢辭駕出朝去

挑人馬代領三軍拔大營

姜維辭駕、領兵同衆將來至漢中、差人往西羌借兵。然後築土城於菊山之下、盡發糧草於川口、依丞相的舊制、依次進兵。△省略 c √此一時、司馬宜染病、堪堪至死。把二子喚到榻前囑咐說、吾事魏多年、人臣之位極矣。人皆

疑我有篡之心、吾長懷恐懼。我死之後、你二人善理國政、慎之、慎之。言畢而亡。司馬師・司馬昭申奏了魏主。

曹芳重加祭葬、此事表過不提。△省略 d √且說姜維令廖化・張疑為左右先鋒、夏侯楨為參謀、張翼為運糧大使、

出陽平關前來伐魏。早有中原的細作探知了此事、報與魏主曹芳。

まず、△省略 a √について確認しておく。『演義』「武侯預伏錦囊計」(105a)では、孔明が埋葬された後に杜

甫の詩があり、それに続いて呉が国境警備の軍を増強することが述べられる。同盟を結ぶ蜀は使者宗預を派遣して説明を求め、それが魏に備えるためとの返答を得て後主は安心し、孔明の遺言通りに臣下を封ずる。ただ、その沙汰に

不満を抱いた楊儀は、魏へ投降しておればと恨み言を口にしたため平民に落とされ、それを恥として自刎する。一方で、『三國誌』の原文を見れば、杜詩に続いて楊儀の話となっており、呉軍の国境兵増強と使者宗預のことには何も触れられていない。

次に、楊儀が自刎した後続く、△省略b▽以下の八句を見ると、曹叅が死んで曹芳が跡を継ぎ、司馬懿は権力を専らにして曹爽を誅殺したので、曹爽と親族関係にあった夏侯覇は、それを恨んで蜀に降り、そして姜維が北伐を上奏する、となっている。同様に、これらを『演義』に照らし合わせてみると、ここには非常に大胆な省略があることに気づく。つまり、「武侯預伏錦囊計」(105a)で楊儀が自刎した後には、本来ならば、「魏主拆取承露盤」(105b)、「公孫淵兵敗死襄平」(106a)、「司馬懿詐病賺曹爽」(106b)、「魏主政歸司馬氏」(107a)と続くはずであるのだが、『三國誌』ではそれらに該当する箇所が見あたらず、実に二回分の話がたった八句にまとめられ、「姜維兵敗牛頭山」(107b)に続いているのである。

『演義』では、姜維が夏侯覇を後主に引見し、北伐を上奏、反対を振り切って出兵すると、牛頭山の戦闘場面が「丁奉雪中奮短兵」(108a)の冒頭まで続く。そして次の一段で、司馬懿が病に倒れ、後事を二人の息子に委ねる。しかし、引用した原文のように、『三國誌』では、姜維が出兵したところにすぐ△省略c▽があって、牛頭山の戦闘場面、「姜維兵敗牛頭山」(107b)の一則が省略され、すぐに次回の司馬懿の病床に場面が転換される。

では、司馬懿の倒れた場面の後はどうなっているかという点、一見すると戦闘場面が語られることから、ここに牛頭山の戦いが入っているかとも思われるが、実はこれはさらに進んで、『演義』「困司馬漢將奇謀」(109a)の冒頭であり、全く別の機会の、陽平関を舞台とした戦闘に続いているのである。すなわち、この△省略d▽では「丁奉

雪中奮短兵」(108a)「孫峻席間施密計」(108b)の二則一回合が何の痕跡も残さぬよう削除されているのである。こういった例からも、魏と呉の国内事情に関する話は次々と省略されているのが看取される。

⑩『三國誌』卷一百三十八

姜維一見、從憂中化喜、連忙回馬、此時衆魏兵俱各趕到。姜維手無兵刃、不敢前去、旋馬而走。衆魏兵只顧搭救郭淮、哪裏顧得追趕敵將。及至把郭淮救回大營、拔出箭頭、怎奈血流不止、竟自絕氣身亡。此一時姜維見敗回的人馬不少、收住殘兵、重新下寨。歇息銳氣、仍要伐魏。有大將張翼上前相攔諫言說、蜀地淺狹、錢糧不敷、只直拒守方好。姜維說、列位有所不知、諸葛未出茅廬之先、以定三分天下。他尚且六出祁山以伐中原。不幸半途而毀、以致功業無成。吾今領丞相的遺命、該當盡忠報國以繼其志、雖死無愧也。

姜維は西羌に要請した援軍の到着を喜ぶが、実は彼らはすでに魏軍に降伏しており、郭淮の計略で援軍を装って蜀軍を攻めてくる。姜維はその計略にかかり、武器を取ることもできずに敗走するが、追って来た郭淮の放った矢をつかみ取り、却って郭淮に射かけ命中させた。引用は姜維がそれを見て喜んだところからで、『三國誌』卷一百三十八、『演義』では「困司馬漢將奇謀」(109a)に該当する、⑩の△省略dであげた場面の続きである。

姜維は郭淮の首級をあげようと馬をめぐらす、魏軍の追っ手が来たのであきらめて退却する。魏の兵士は郭淮を助けて陣に戻るが、矢じりを抜くと郭淮は出血が止まらず死んでしまった、とある。『演義』、『三國誌』ともこまでの展開は同じであるが、引用傍線部のところから大きく異なってくる。『三國誌』では、姜維は多くの人馬を失っ

たが、敗残兵を集めて再度陣を構え、英気を養い、さらに魏を討とうとする。すると張翼が守りを固めるよう進言するが、それに対して孔明の遺命を受けたという固い決意を表明する。

一方、引用傍線部に対応する『演義』の文章を見てみると、「維折了許多人馬、一路收扎不住、自回漢中。」とされている。つまり、多くの人馬を失ったので陣を構え直すことができず、一旦漢中まで退却したというのである。そして場面は、司馬師の専横に悩んでいた曹芳が、大臣らに密詔を出して司馬師誅殺をたくらむも露見し、却って退位させられて曹髦が新しく帝位につくという「廢曹芳魏家果報」(109b)に移る。さらに、そのような司馬師の行為に対して、母丘儉と文欽・文鸯父子が反乱を起こすが結局鎮められ、司馬師は弟の司馬昭に後を任せて死ぬという「文鸯單騎退雄兵」(110a)の一則に続く。司馬昭が跡を継いだ次の一段では、姜維がその報を知り北伐を上奏するのだが、該当箇所原文には、「維到漢中、整頓人馬。征西大將軍張翼曰、蜀地淺狹、錢糧鮮薄、不宜遠征。不如據險守分、恤軍愛民、此乃保國之計也。」とあり、以下には姜維の反論が『三國誌』とほぼ同じ内容で述べられる。つまり、『演義』なら一度漢中へ退却すべきところを、『三國誌』では次の機会の漢中進出とつなげ、その間には漢中へ帰らず再び陣を構えた、という一句を入れることによって、二つの異なる場面を一つに密着させているのである。それによって、魏の国で起こった皇位継承や反乱という大事件を、何事もなかったかのように省略している。

この『三國誌』巻一百三十八は省略のパターンが顕著であるため、省略や異同のある箇所を中心に、両者の場面展開を筆者なりの要約によって示しておく。また、対照の便を考慮して適宜空白を設けている。

『演義』

- 鐵籠山姜維困司馬昭、昭拜甘泉
- 郭淮利用羌兵解圍、而被姜維射死
- 姜維退於漢中
- 司馬昭回洛陽、與司馬師篡權 (109a)
- 「廢曹芳魏家果報」 (109b)
- 「文鸯單騎退雄兵」 (110a)
- 鎮壓文鸯之亂、司馬師逝去
- 司馬師訃告↓姜維重新興兵
- 張翼諫言
- 姜維攻破陳泰・王經↓王經走狄道城↓鄧艾助戰
- ↓艾・泰攻破姜維↓維退屯於鍾堤 (110b)
- 姜維只留旗號、偷去南安
- ↓鄧艾看破、守武城山、伏兵斷谷
- ↓大敗於斷谷↓張嶷被魏兵射死

『三國誌』

- 鐵籠山姜維困司馬昭、昭拜甘泉
- 郭淮利用羌兵解圍、而被姜維射死
- 姜維重新安營
- 張翼諫言
- 司馬昭解圍下山↓狄道城合併鄧艾
- ↓鄧艾、迎接司馬昭・陳泰
- ↓司馬師得重病↓司馬昭回洛陽
- ↓艾・泰攻破姜維↓維退屯於鍾堤
- 姜維只留旗號、偷去南安
- ↓鄧艾看破、守武城山、伏兵斷谷
- ↓大敗於斷谷↓張嶷被魏兵射死

↓姜維退於漢中 (111a)

「諸葛誕義討司馬昭」(111b)

「救壽春于詮死節」(112a)

•姜維進攻長城、攻打間、背後魏將衝來

↓登忠大叫「認得鄧將軍否」

↓姜維自思「此必是鄧艾矣」

↓維趕來、艾出曰「勿趕吾兒、鄧艾在此」

↓姜維欲來日決戰、鄧艾同意、兩軍皆退

•姜維下戰書、鄧艾佯應之、一面求救

•姜維探知司馬昭欲引兵來救長城↓退却

「丁奉定計斬孫綝」(113a)

•姜維再三出帥伐魏國 鄧艾早挖地道等蜀兵

•鄧艾從地道夜襲蜀營

•蜀兵以連弩射回魏兵、鄧艾感嘆姜維將才

•「姜維門陣破鄧艾」(113b)

↓姜維大破鄧艾·司馬望

↓司馬望用離間計、黃皓奏知後主維欲投魏

↓姜維重新安營

•次日、姜維挑戰、魏將衝來

↓登忠大叫「爾可認得鄧將軍否」

↓姜維暗說「這個人必是鄧艾」

↓維趕來、艾出曰「姜維你休趕吾兒與我爭」

↓姜維欲來日決戰、鄧艾同意、兩軍皆退

•回營後、鄧艾說「我想着今日夜晚去劫營」

•蜀兵以連弩射回魏兵、鄧艾感嘆姜維將才

•「姜維門陣破鄧艾」

↓姜維大破鄧艾·司馬望

↓司馬望用離間計、黃皓奏知後主維欲投魏

↓後主宣詔、姜維只得班師回朝

『曹髦驅車死南闕』(114a)

↓姜維三路進兵

↓魏參軍王瑾詐降姜維

↓後主宣詔、姜維只得班師回朝

・探子稟道、司馬昭自討晉公、殺先帝、立了曹奂

↓姜維三路進兵

↓魏參軍王瑾詐降姜維

傍線部は、『三國誌』において一則全てが省略されているところだが、その内容を見ると、やはり専ら魏と呉の國內事情に関する一則であることに気づく。これらの省略の傾向から、蜀を中心に語るといふ制作者の改編態度は、もはや明らかであろう。また、その手法としては、ゴチック体で示したように、「一時退却」と「再度出兵」の間を省いて、退却せずに話を続けるというのが一つ、最も簡単なのは、先にも述べた省略部分の話を間者の報告により知るといふ一句を入れることである。

⑩『三國誌』卷一百三十九

いよいよ『三國誌』最終巻である。『演義』では百十四回の後半に相当しており、晋の統一まで語るためには約六巻分を収める必要がある。これまでの対応から考えると、当然これも無謀な数字であり、大幅な省略が容易に想像される。

魏から蜀に降って姜維を補佐した夏侯禰は、『演義』「詔班師後主信諭」(115a)のはじめで、鄧艾の空城計にかかって命を落とす。そのあたりから『三國誌』の原文を引用しつつ確認していこう。

聽說是	夏侯喪命心傷感	難爲他	棄魏降汗爲威名
付安營	一心定把祁山取	他只想	恢復中原立大功
△省略 a √	書中不表祁山事	再把洛陽明一明	司馬昭
自爲晉公傳國政	他本有意篡魏君	爲恐怕	汗主興師來問罪
因此上	催着鄧艾把蜀平	司馬昭	這日昇廳問文武
怎能夠	早滅西蜀勦江東	列位有何良謀計	大丈夫
何不出朝擗功名	大將中會開言道	我情願	協同鄧艾立奇功
我今自有良謀計	若要是	六耳相傳法不靈	司馬昭
聞聽此話心歡喜	把中會	封爲征西大將軍	代領着
十萬精兵幫鄧艾	立刻拔營衝登程	△省略 b √	那一日
天色以晚安營寨	馬步三軍誰不聽	後軍不走前軍住	登時之間安下營
那天不過三更古	一庄吃事好京人		

夏侯霸が死ぬのは△省略 a √ 「詔班師後主信讓」(115a) においてであるが、『三國誌』ではその箇所の描写し
 がなく、実際の則目の内容である、後主が宦官の讒言を聞き、姜維らに退却を命ずる場面は全く触れられていない。
 ということは、当然、次の則目である宦官の災いを避けて姜維が屯田するという、「托屯田姜維避禍」(115b) の

話もない。ただ、鍾会を登場させるという目的で、司馬昭が姜維を討つ者を朝議において求める話に取り込まれている。夏侯淵の死と鍾会の登場は、ともに物語を無理なくつなぐために、わずかにその一段が使用されているにすぎず、則目の話は見えないので省略と考えて差し支えないであろう。

△省略b△においては、鍾会が出発した後の「鍾会分兵漢中道」(116a)には触れず、すぐに「武侯顯聖定軍山」(116b)の孔明顯聖の場面に入る。鄧文が夢を占う段や、後主が巫女の言葉を盲信する段など、物語の展開には大きく影響しないので削られたと考えられる。一方で、孔明が鍾会の夢に現れる後半の話は、ほぼそのまま「三國誌」にも見られることから、やはり蜀に肩入れする制作者(と同時に、それを求める聴衆)の態度が顯著である。

その後の展開としては、『演義』「鄧士載偷渡陰平」「諸葛瞻戰死綿竹」(117ab)の二則、及び「哭祖廟一王死孝」(118a)の一則が、概ね『演義』に基づいて語られる。蜀の後主が鄧文に降伏するのはこの百十八回前半で、『三國誌』は残りの五則を全て端折り、蜀の滅亡とともに幕を下ろす。最後にその唱詞を挙げておく。

汗 <small>(蜀)</small> 後主率領諸王與太子	還有合朝文武卿	俱各是身受綁繩步下走	出了成都正北門
到魏營鄧文迎出到營外	但見他親結其繩把陛下稱	並非是罪臣膽大來欺犯	皆因是天意歸魏不由人
可笑是此時鄧文如說夢	那曉得眼下該他大數終	因為與重會爭功全喪命	臨危之時須冒紅
天命該當歸於晉	司馬炎	篡了曹家錦江洪	東吳的
孫皓他也歸降順	最可嘆	三國爭雄歸一人	葬送了
多少爭名奪利客	累殺了	志勇的英雄數不清	且說那

後主付又遺蔣顯

叫他即刻到軍營

速叫姜維來投順

奉命的

來見伯約訴元音

姜維聞言長嘆氣

只說是

爲人難以扭蒼窮

言必時

拔劍瑤環身自刎

可嘆他

不能如心喪殘生

皆因爲

天意該當歸馬司

方有這一統華夷被那大晉擊

付表の対応一覽を見れば一目瞭然であるが、卷一百三十七から一百三十九の三卷には、『演義』の百四回から百二十回までの、実に十七回分が押し込まれている計算になる。実際には、ここに大幅な省略があるので、十七回の内容を全て語っているわけではないのだが、それまでの『演義』との対応から考えると、非常に駆け足で物語に幕を引こうとする制作者の態度が、ここから浮かび上がってくる。これは、『演義』百四回において孔明が物語の舞台から退場することと無関係ではあるまい。三国志の物語が、前半は劉備、関羽、張飛という三人の義兄弟、後半は孔明を中心に展開することは、あらかじめ指摘するまでもない。しかも、『演義』の成立以前から、劉備あるいは蜀に肩入れする読み方が広まっていたこともよく知られている。そのような捉え方はおそらく当時の聴衆も同じであったろうし、彼らからすれば、孔明死後の物語にはさほど期待もしていなかったと想像される。あるいは足も遠のいたかもしれない。そういった要求がある以上、制作者からすれば、主役の降りた舞台の幕をいかに早く引くか、ということに腐心せざるを得ないはずであり、最後の三巻には、その痕跡が顕著に認められる。

以上、車王府本鼓詞『三國誌』の省略部分について見てきたが、その検討を通して考えられる『三國誌』の特徴をあらためて整理しておく、次のようなことが言えるであろう。

まず、省略された箇所の内容についてはもはや誰の目にも明らかであろう。後漢の王室に関する描写や、呉の国に関する話柄が多く省略される傾向にある。とりわけ帝位の交代などは重要な事件であるはずだが、曹操と劉備、魏と蜀という物語の軸を為す構想からはずれるため省略されたのであろう。その観点から再度確認すると、第三節で挙げた曹操、あるいは魏に関する省略の例が、どれも劉備や蜀と関わる場面でないのは示唆的である。そして最後の三巻においては、魏の帝位交代や司馬師との政権争いなども省略の対象となっている。これらの傾向は、蜀が滅亡した後の五則が全て省略されていることから分かるように、この『三國誌』が、あくまで蜀を中心に据えており、それこそが、三國志物語を愛好する者の大多数の意見であったことを雄弁に物語っている。

では、どのように『演義』を省略し、物語を展開していくのか。この点についても具体例の中で指摘してきたが、ここで再度まとめると、最も簡単な方法は、物語の展開に影響のないところを削ることである。この場合、何も断らずに省略することもしばしばある。とりわけ登場人物に関する逸話などは省略されやすい。さらには、異なる場所にあるよく似た語句を利用し、それを一つにしてその間を省略するという手法も典型的である。また、「不在話下」のような場面転換の際に、本来続く場面よりさらに先の「却説」などにつなげていくこともある。さらには問者の報告だけですませることは再三述べた。むしろ、どのような省略方法を採用しても、物語の展開に破綻がほとんどないこ

とから、制作者は細心の注意を払って構成を整えたと思われる。

最後に一点だけ、『三國誌』巻一百十五について付け加えておこうと思うが、そのために、まず『演義』「曹丕廢帝篡炎劉」(080a)のあらすじを示しておく。華歆が禪讓の件を切り出すと獻帝は反対するが、李伏、許芝、王朗と立て続けに禪讓を迫る。次の日、出仕しない獻帝に対して皇后曹氏が詔を聞きだす。そこに曹洪らが劍を帯びたまま入り込んできたので、曹氏は彼らの不忠を痛罵して下がる。やむを得ず獻帝が出仕すると、王朗、華歆が脅して禪讓を迫り、曹洪が玉璽を管理する祖弼を斬って玉璽を奪うと、獻帝もついにあきらめる。

『三國誌』では禪讓を次々迫るところで、王朗の台詞を華歆が発しているなどの相違が見られ、さらには、皇后曹氏までもが獻帝に早く位を讓るよう迫るといふ設定になっている。また、玉璽もやむなく張音に出させることになっており、禪讓の詔勅も省略されているなど、このあたり『演義』とはやや懸隔がある。さらに先へ進むと、蜀の面で張嘉なる人物が玉璽を偶然拾い、それを孔明に獻ずる場面なども省略されている。

当初、筆者はこれらの相違や省略も『三國誌』制作者の改編であろうと考えていたが、実は英雄志伝本系統の『演義』を見ると、いま挙げたような箇所が見事に一致しているのである。再度確認しておくが、この『三國誌』は筆者の検証に拠れば、巻九十二のあたりを境にして、それ以前は英雄志伝本系統の版本、以後は毛宗崗本を中心に改編している。『三國誌』に挿入された詩と『演義』各版本の詩を比較すれば、それは明らかである。しかし、今回、省略部分を改めて整理する過程で、このような現象を認めるに至った。すなわち、巻九十二以降において、基本的には毛宗崗本を中心に据えているとはいえず、場面によっては英雄志伝本系統の版本に拠っている箇所があるということである。『三國誌』の全体像を明らかにする上で、この点の詳細に関しては未だ検討の余地があるといえよう。

本稿では『三國誌』の省略部分を具体的に挙げ、それらが意味するところを考察した。省略されている箇所を挙げることによって指摘できるのは制作者の改編態度であり、それはとりもなおさず、当時の聴衆の趣向を具現化したものである。

最後に、先に発表した小論二編で得た結論とあわせることで、この車王府本鼓詞『三國誌』の全体像をまとめておく。本作品は、底本に毛宗崗本と英雄志伝本系統の版本の二種類が使用されていることから、清代中後期には完成していたと考えられ、その構成は小説『三國志演義』によりながらも、戯曲のプロットや、制作者の創作になると思われる挿入説話が多く見られる。一方で、後漢王室や呉、魏に関する話柄について大幅な省略も見られることから、聴衆の嗜好に合致するよう、非常に弾力的且つ積極的に物語の取捨選択をおこなった、三國物語の全体を扱った唱本とすることができるといえる。

注

(1) その他に目録や先行研究などから、『三國綱鑑鼓詞』や『通俗三國志全伝』、あるいは、それぞれ複数部が現存する北京租賃唱本『三國志鼓詞』及び『繪図三國志鼓詞』などが確認できる。このうち『繪図三國志鼓詞』のみ足本であるが、これは『三國志演義』の毛宗崗本をかなり忠実に鼓詞へと改編したものであり、抄本の存在も確認されておらず、実際に上演された脚本とは認めがたい。ゆえに、別に稿を用意して論ずる所存である。

(2) 「車王府本鼓詞『三國誌』の成立過程について——『三國志演義』との関係を中心に——」、「車王府本鼓詞『三國誌』の挿入説話について」(ともに関西大学中国文学会紀要 第二十七、八号二〇〇六、七)

(3) 『三國誌』原文の引用は全て繁体字に統一した。なお、「■」は判読不能の文字を示し、句読及び校訂は筆者による。また、『演義』は毛宗崗本を用いることとし、(001a)は毛宗崗本第一回前半を指す。

(4) 『三國誌』の巻数と毛宗崗本の則目を、あくまで目安として対応させている。また、表の備考欄における省略と挿話以外は、筆者の覚書と理解していただきたい。

『三國誌』・『三国志演義』（毛宗崗本）対応表

巻数	該当する毛宗崗本の則題	備 考
巻1		斬熊虎挿話
巻2		
巻3	袁桃園豪傑三結義(001a)	
巻4	斬黃巾英雄首立功(001b)	
巻5	張翼德怒鞭督郵(002a)／張温明董卓叱丁原(003a)	甘夫人を娶る話／何國舅謀謀宦豎(002b)省略
巻6	鎖金珠李瓌説呂布(003b)	
巻7	廢漢帝陳留踐位(004a)／謀董賊孟德獻刀(004b)	
巻8	發鳩詔諸鎮應曹公(005)	
巻9	破關兵三英戰呂布(005b)	
巻10	焚金闕董卓行兇(006a)／覆玉璽孫堅背約(006b)	
巻11		
巻12	袁紹盤河戰公孫(007a)	嚴剛初出
巻13		姚斌・姚斌父子が水難に遭う張飛を救出する挿話
巻14	孫堅跨江擊劉表(007b)	
巻15	王司徒巧使連環計(008a)	
巻16	董大師大鬧鳳儀亭(008b)	
巻17	除兇暴呂布助司徒(009a)	
巻18	犯長安李傕聽買關(009b)	
巻19	魏王室馬騰舉義(010a)	
巻20	報父仇曹操興師(010b)	
巻21	劉皇叔北海救孔融(011a)	
巻22		劉備らと曹操軍の戦闘描写追加
巻23	劉皇叔北海救孔融(011a)	
巻24		前半に陶恭祖三讓徐州(012a)を挿入
巻25	呂温侯漢陽破曹操(011b)／曹孟德大破呂布(012b)	
巻26		
巻27		
巻28		
巻28	李傕郭汜大交兵(013a)／楊奉董承雙救駕(013b) 曹孟德移駕幸許都(014a)	
巻29	呂奉先乘夜襲徐郡(014b)	
巻30	太史慈甜門小霸王(015a)／孫伯符大戰嚴白虎(015b)	
巻31	呂奉先射戟轅門(016a)	
巻32	袁公路大起七軍(017a)／曹孟德會合三將(017b)	
巻33	曹孟德敗師滑水(016b)／夏侯惇拔矢啖睛(018b)	賈文和料敵決勝(018a)省略／拔矢啖睛の場面なし
巻34	下邳城曹操圍兵(019a)	
巻35		

卷36	白門樓呂布殞命(019b)	
卷37		嚴剛、韓雄ら五符を破る
卷38	〔公孫瓚大戦袁紹〕	三国因押話
卷39		嚴剛戦死→嚴魯収魂／韓雄、公孫瓚に帰順
卷40		嚴魯・韓雄帰山／趙雲母劉備
卷41		曹阿瞞許田打圍(020a) 董園舅内閣受詔(020a)
卷42	曹操煮酒論英雄(021a)	
卷43	關公賺城斬車胄(021b)／袁曹各起馬歩三軍(022a)	
卷44	關張共擒王劉二將(022b)／禰正平操衣罵賊(023a) 吉太醫下毒遭刑(023b)／國賊行兇殺貴妃(024a)	
卷45	皇叔敗走投袁紹(024b)	
卷46	屯土山關公約三事(025a)／教白馬曹操解圍(025b)	
卷47	袁本初損兵折將(026a)	
卷48	關雲長挂印封金(026b)	
卷49	美髯公千里走單騎(027a)	
卷50		
卷51	漢壽侯五關斬六將(027b)	
卷52		
卷53	斬蔡陽兄弟釋疑(028a)	
卷54	會古城主臣聚義(028b)	
卷55		<ul style="list-style-type: none"> ・小霸王怒斬于吉(029a)／碧眼兒坐領江東(029b)省略 ・戰官渡本初敗績(030a)／劫烏巢孟德燒糧(030b)／ ・曹操合身破本初(031a)省略 ・奪冀州袁尚爭鋒(032a)／決漳河許攸獻計(032b)／ ・曹丕乘機納甄氏(033a)／郭嘉遺計定遼東(033b)省略 ・荆州に落ちる劉備と追う曹操軍の戦闘を描写
卷56	玄德荆州依劉表(031b)	
卷57		
卷58		
卷59	蔡夫人隔屏聽密語(034a)	
卷60	劉皇叔躍馬過檀溪(034b)／玄德南漳逢隱淪(035a) 單福新野遇英主(035b)／玄德用計取樊城(036a)	
卷61	元直走馬薦諸葛(036b)／司馬徽再薦名士(037b)	
卷62	劉玄德三顧草廬(037b)／定三分隆中決策(038a) 戰長江孫氏報仇(038b)／荆州城公子三求計(039a)	
卷63	博望坡軍師初用兵(039b)	
卷64	蔡夫人讒獻荆州(040a)	
卷65	諸葛亮火燒新野(040b)／劉玄德攜民渡江(041a)	
卷66	趙子龍單騎救主(041b)	
卷67	張翼德大鬧長板橋(042a)／劉豫州敗走漢津口(042b)	
卷68	諸葛亮舌戰群儒(043a)／魯子敬力排眾議(043b)	

卷69	孔明用智激周瑜(044a)／孫權決計破曹操(044b) 三江口曹操折兵(045a)	
卷70	群英會蔣幹中計(045b)／用奇謀孔明借箭(046a) 獻密計黃蓋受刑(046b)／關澤密獻詐降書(047a)	
卷71	關統巧授連環計(047b)／宴長江曹操賦詩(048a) 鎖戰船北軍用武(048b)／七星壇諸葛祭風(049a)	(048b)魚鱗・張南の出陣省略
卷72	三江口周瑜縱火(049b)／諸葛亮智算華容(050a)	
卷73	關雲長義釋曹操(050b)	
卷74	曹仁大戰東吳兵(051a)	
卷75	孔明一氣周公瑾(051b)／諸葛亮巧辭魯肅(052a)	
卷76	趙子龍智取桂陽(052b)	
卷77		
卷78	關雲長義釋黃漢昇(053a)	
卷79		白狼教刀押話
卷80	孫仲謀大戰張文遠(053b)	
卷81	吳國太佛寺看新郎(054a)	
卷82	劉皇叔洞房續佳偶(054b)	
卷83	玄德智激孫夫人(055a)	
卷84	孔明二氣周公瑾(055b)／曹操大宴銅雀臺(056a)	
卷85	孔明三氣周公瑾(056b)	
卷86	柴桑口臥龍弔喪(057a)	
卷87	耒陽縣鳳雛理事(057b)	龐統助案押話
卷88	馬孟起興兵雪恨(058a)／曹阿瞞割鬚棄袍(058b)	
卷89	許褚裸衣鬥馬超(059a)	
卷90	曹操抹書問韓遂(059b)	
卷91	張永年反離楊修(060a)／龐士元議取西蜀(060b)	龐統、自らその弟を騙り張松に近づくと押話
卷92	趙雲截江奪阿斗(061a)	
卷93	孫權遣魯退老瞞(061b)／取涪關楊高授首(062a) 攻雒城黃魏爭功(062b)	
卷94	諸葛亮痛哭龐統(063a)／張翼德義釋嚴顏(063b)	
卷95	孔明定計捉張任(064a)／楊阜借兵破馬超(064b)	
卷96	馬超大戰夏侯淵(065a)	
卷97	劉備自領益州牧(065b)	
卷98	關雲長單刀赴會(066a)	伏皇后爲國捐生(066b)及び 曹操平定漢中地(067a)の前半省略
卷99	曹操平定漢中地(067a)	
卷100	張遼威震洮陽津(067b)／甘寧百騎劫魏營(068a)	
卷101	左慈擲杯戲曹操(068b)／卜周易管輅知機(069a)	
卷102	討漢賊五臣死節(069b)／猛張飛智取瓦口隘(070a)	

卷103	老黃忠計奪天瀟山(070b)	
卷104	占對山黃忠逸待勞(071a)	
卷105	據漢水趙雲寡勝衆(071b)	
卷106	諸葛亮智取漢中(072a)	曹彰・夏侯惇・張郃対張飛
卷107	曹阿瞞兵退斜谷(072b)	楊修故事省略 曹操退却, 蜀軍連勝の描写
卷108	玄德進位漢中王(073a)	趙雲対文聘, 劉備漢中王即位
卷109	雲長攻拔襄陽郡(073b)	
卷110	龐令名抬轎決死戰(074a)	
卷111	關雲長水淹七軍(074b)/關雲長刮骨療毒(075a)	
卷112	呂子明白衣渡江(075b)	關羽の家族と荊州を落ちる関索抑詰 暴剛助戦 三年後回復 次男關興は漢中へ
卷113	徐公明大戰沔水(076a)/關雲長敗走麥城(076b) 玉泉山關公顯聖(077a)	
卷114	洛陽城曹操感神(077b)/治風疾神醫身死(078a) 傳遺命奸雄數終(078b)	(078b)華陀治瘵例省略→志伝本なし 兄遇弟曹植賦詩(079a)原欠カ
卷115	侄陷叔劉封伏法(079b)/曹丕廢帝篡炎劉(080a) 漢王正位稱大統(080b)/急兄仇張飛遇害(081a)	孟達魏に帰順, 劉備への手紙省略→志伝本にあり
卷116	雷弟恨先主興兵(081b)/孫權降魏受九錫(082a) 先主征吳賞六軍(082b)	
卷117	戰猱亭先主得仇人(083a)	
卷118	守江口書生拜大將(083b)	
卷119	陸遜營燒七百里(084a)/孔明巧布八卦陣(84b) 劉先主遺詔托孤兒(85a)	
卷120	諸葛亮安居平五路(085b)/魏強呂蒙奪還天爵(086a) 破曹丕徐盛用火攻(086b)	
卷121	征南寇丞相大興師(087a)/抗天兵懼王初受執(087b)	
卷122	渡瀘水再縛番王(088a)/讎詐降三擒孟獲(088b) 武鄉侯四番用計(089a)	
卷123	南蠻王五次遭擒(089b)	
卷124	驅巨獸六破蠻兵(090a)	
卷125	燒藤甲七擒孟獲(090b)/祭瀘水漢相班師(091a) 伐中原武侯上表(091b)	
卷126	趙子龍力斬五將(092a)/諸葛亮智取三城(092b)	
卷127	英伯約歸降孔明(093a)	
卷128	武鄉侯罵死王朗(093b)/諸葛亮乘雪破羌兵(094a) 司馬懿克日擒孟達(094b)	
卷129	馬綏拒諫失街亭(095a)/武侯彈琴退仲達(095b)	

卷130	孔明揮淚斬馬謖(096a)／周舛斷髮譚曹休(096b) 討魏國武侯再上表(097a)	
卷131	追漢軍王雙受誅(098a)／魏陳倉武侯取勝(098b)	孫禮即位省略
卷132	諸葛亮大破魏兵(099a)／司馬懿入寇西蜀(099b)	
卷133	漢兵劫寨破曹真(100a)／武侯門陣辱仲達(100b)	
卷134	出隴上諸葛妝神(101a)／奔劍閣張郃中計(101b)	
卷135	司馬懿占北原渭橋(102a)／諸葛亮造木牛流馬(102b)	
卷136	上方谷司馬受困(103a)／五丈原諸葛禱星(103b)	孫禮三路伐魏省略
卷137	限大星漢丞相歸天(104a)／見木象魏都督喪膽(104b) 武侯預伏錦囊計(105a)／困司馬漢將奇謀(109a)	魏主拆取承露盤(105b)／公孫淵兵敗死襄平(106a) 司馬懿詐病譚曹爽(106b)／魏主改節司馬氏(107a) 姜維兵敗牛頭山(107b)／丁奉雪中奮短兵(108a) 孫峻席間施密計(108b)
卷138	姜維背水破大敵(110b)／鄧士載智敗姜伯約(111a) 取長城伯約憂兵(112b)／姜維門陣破鄧艾(113b) 姜維棄糧勝魏兵(114b)	廢曹芳魏家果報(109b)／文鸯單騎退魏兵(110a) 諸葛誕殺討司馬昭(111b)／教習春于詮死節(112a) 丁奉定計斬孫琳(113a)／曹魏驅車死南關(114a)
卷139	武侯顯聖定軍山(116b)／鄧士載偷渡陰平(117a) 諸葛瞻戰死綿竹(117b)／哭祖廟一王死孝(118a)	詔班師後主信讒(115a)／托屯田姜維避禍(115b) 隨會分兵漢中道(116a)／入西川二士爭功(118b) 假投降巧計成虛話(119a)／再受禪依樣畫葫蘆(119b) 西社預老將獻新謀(120a)／降孫皓三分歸一統(120b)